

はじめに 当院は開業以来**3280人の訪問診療患者**を受け入れてきた。患者のほとんどは、急変し病院に入院したり、死亡することで訪問診療から離脱している。しかし、中には**病状が軽快し離脱する患者**も少数含まれる。私もこのような軽快離脱症例を経験した。自験例を含め、当院における軽快離脱症例について調べてみた。

方法と結果 2000年11月から2017年12月の間に当院で訪問診療を行った患者3280例中、**10例の軽快離脱症例**がいた。この10例の年齢、性別、主病名、自立度、医療処置、療養場所、診療期間、離脱後転機を抽出してみた。

年齢	性別	主病名	日常生活自立度		要介護	医療処置	療養場所	家族の同居	診療期間		離脱後転機
			障害、認知						年月日	日数	
93	女	腰椎圧迫骨折	B2	自立	1	なし	自宅	あり	2005/8/30 -2006/4/3	216	終診
85	男	変形性腰椎症	A2	自立	なし	なし	自宅	あり	2005/8/24 -2006/7/10	320	外来
79	男	陳旧性結核	A2	自立	3	HOT	自宅	あり	2009/4/13 -2009/7/17	85	外来
80	女	甲状腺機能低下症	A2	I	1	なし	有料老人ホーム	なし	2008/2/27 -2009/12/9	651	外来
66	男	低栄養	B2	I	3	なし	有料老人ホーム	なし	2009/9/30 -2009/12/16	77	外来
86	男	関節リウマチ褥瘡	C2	I	5	褥瘡処置	自宅	あり	2009/5/11 -2010/3/29	322	外来
85	女	パーキンソン病腰痛	A2	I	3	なし	自宅	あり	2011/8/18 -2011/12/27	131	外来
84	女	右大腿骨頸部骨折	B2	I	5	なし	有料老人ホーム	なし	2011/11/15 -2012/4/10	147	終診
81	女	関節リウマチ腰痛	B2	I	3	なし	自宅	あり	2013/6/11 -2013/7/19	38	外来
自験例 64	男	褥瘡、低栄養	B1	自立	3	褥瘡処置	自宅	あり	2017/4/28 -2018/4/10	347	外来

【自験例】64歳男性

主病名：褥瘡、胃癌術後低栄養 既往歴：56歳 脊柱管狭窄症で手術

現病歴：2007年4月に胃癌で幽門側胃切除術を受ける。次第に食事摂取が困難になり、アルコールを中心とした食生活になる。

徐々に筋力が低下し、歩行が困難となり2016年12月に大学病院受診し、低栄養と診断される。2017年3月に仙骨部に褥瘡ができ、訪問看護が介入していたが、徐々に悪化し、感染所見（発赤、熱感）出現。入院を拒否するため、4月28日当院訪問診療介入となる。

経過：仙骨部褥瘡はDESIGNでD4e3s6I3G4N3P1と評価（図1）。褥瘡の白苔を除去すると膿が流出した（図2）。オルセノン軟膏を使用していたが、ゲーベンクリームに変更。WBC12100, Alb1.6, Hb9.7と感染と低栄養認めた。食事は炭水化物メインだが摂取できており、フォリアミン（葉酸）とピタノイリンを処方した。デブリドメントを繰り返し、褥瘡が浄化したところで、プロスタンディン軟膏に変更し、徐々に褥瘡は治癒した（図3、4、5）。栄養状態も改善し、7月18日にはAlb3.3まで上昇した。治療と並行してリハビリも行い、歩行も可能となってきたため、外来通院に移行し、訪問診療離脱となった。



図1
初診時
3.5x2.5cmの褥瘡



図2
切開すると膿＋



図3
26日後
デブリドメント完了



図4
68日後
肉芽増生



図5
157日後
上皮化し治癒

考察 自験例を含めた当院における軽快離脱患者は10例と全体における**わずか0.3%と非常に少ない**。軽快離脱症例は褥瘡、疼痛、低栄養によるADL低下で訪問診療開始になった症例が多く、訪問診療開始時はすべての症例が、準寝たきりまたは寝たきりであったが、**短期間にADLを回復し、歩行できるようになっていることが特徴的**である。**訪問診療を1年以上行なった症例は1例のみ**であった。これは、これ以上の時間がかかるとサルコペニアが進行し、外来に通えるほどの生活自立が得にくいためかもしれない。面白いことに、有料老人ホームの3例を除いた**自宅6例は独居ではなく、家族と同居していた**。自験例でも妻と同居しており、栄養や清潔、精神面で妻が気を配っており、病状の回復に大きな影響を与えていた印象であった。また同居者がいることで、外来への移行もスムーズに行えた可能性があり、軽快離脱できるかどうかのカギを握っているのかもしれない。

結語 自験例を含めた当院における軽快離脱患者10例を抽出してみた。訪問診療は看取りや状態の維持が目的になりがちであるが、中には**軽快離脱できる症例が少数ながらあることを念頭に、治療を行なっていく必要がある**。

当院における訪問診療軽快離脱症例の検討

医療法人ゆうの森 たんぽぽクリニック
飯森俊介、白木良治、中川麻里、太田敦、永井康徳